

ワルシャワ大学 エヴァ・パウシュ＝ルトコフスカ教授

「タデウシュ・ロメル 杉原ビザで渡日したユダヤ人難民を救った駐日ポーランド大使」

ご紹介いただきました、ワルシャワ大学のエヴァ・ルトコフスカでございます。

今日のとても大事な式典の前に、講演の機会を与えてくださった皆様方に心より感謝いたします。どうもありがとうございます。時間もあまりないので、読ませていただきます。

杉原千畝ビザの件は、皆さんよくご存じだと思いますが、彼のビザによって、日本に来たポーランド人難民のために、多く貢献した駐日ポーランド大使タデウシュ・ロメルのことは、ほとんど知られていません。そのため、今日は、彼の功績について少しお話をさせていただきます。よろしくお祈りします。

ロメルの略歴を見てみると、第一次世界大戦が終結したパリ講和会議にポーランド国民委員会の代表とともに参加しました。その会議において、日本を含む連合国側は、ポーランド独立を認めました。それは1919年の3月6日のことでした。ポーランドは、以前は、大体、18世紀の終わりごろに、第3次分割のため独立を失いました。そのあとすぐ、1919年以降のことですが、ロメルはポーランド外務省の勤務となり、外交官として、イタリア、その後、ポルトガルの公使として赴任しました。1937年4月に公使として日本に行き、10月に大使に昇格されました。

1930年代後半ころ、ヨーロッパ情勢が緊迫する中、ポーランドにとって、最大の懸案は、ドイツ及びソ連との関係でした。ロメルは日本において、好意的かつ中立な政策の実行に当たるはずでした。両国の、ポーランドと日本の友好関係のためにとっても大事な役割を果たしました。

1939年9月1日、ドイツ軍のポーランド侵攻により、第二次世界大戦が勃発し、9月17日にソ連はポーランド東部国境を突破しました。10月上旬にポーランドで戦闘が終わり、ポーランドはドイツ軍とソ連軍の占領下に入りました。ポーランド政府は避難し、まず、フランス、その後、イギリスで亡命政府を樹立しました。

日本は、ポーランドに対する友好的関係に変化はないことを公表していたし、従来ポーランド政府との関係も変更するつもりはないと確言しました。日本政府がポーランドとの外交関係を維持しようとした第一の理由は、その当時、共産主義に対抗する上で、ヨーロッパにおけるポーランドの役割を認識していたためです。日本はまた、防共協定に背いて、ソ連と中立条約を締結したドイツを信頼しなくなっていたので、ドイツ側からの圧力にもかかわらず、駐日ポーランド大使館は閉鎖さ

れませんでした。

杉原領事は、カウナスで外務省の許可なしに、自己責任で1940年の7月の終わりごろから、9月1日までに、日本の通過ビザを発給し続けました。

ビザを受けた人々は、主にポーランド系ユダヤ人で、9月中旬から日本に上陸し始めました。彼らは、ほとんどの場合、在カウナスのオランダ領事ヤン・ツバルテンディクによって発給された、オランダ領のキュラソーなどを最終目的地とした日本通過ビザを持って日本にやって来た人々でした。

日本外務省の外交史料館にある、いわゆる「杉原リスト」によると、領事は2,139通のビザを発給しました。子供連れの大人もいたし、カウナスで杉原と協力していた、ポーランド人諜報将校などの手による偽造ビザもあったため、実際に、日本を経由して各国に逃げて行ったポーランド人の数は数千人に上ったと思われます。

杉原のビザを受け取ったポーランド国籍の難民は、シベリア経由で日本の敦賀に着き、その後、東京、神戸、横浜へ行きました。彼らの受け入れなどは、ロメル大使によって、1940年10月に東京で組織された、ポーランド戦争被災者救済委員会があたりました。

ロメル大使は、難民問題についても、40年8月から外相あてに暗合電報でよく送っていました。

例えば、41年2月2日に書いたものを引用します。

「難民の殺到により、緊急の領事業務に携さわらざるを得ず、最も安い宿泊料にして、宿舎を手配する費用は、差し当たり、領事館予算より支出する。1月末までに566名のポーランド難民が到着、その95%はユダヤ人である。このうちの300名をすでにアメリカ、パレスチナ、カナダ、ブラジルなどへ送り出した。ソ連によるリトアニア合併は、当該地域のポーランド人社会に危機的な困難を引き起こしたが、そののち現地で、迫害あるいはカザフスタンへの追放から逃げられる唯一の道として、極東へ向かおうとする衝動的行動が起こり、それが時とともに集団的に強まっている。カウナス地区とビリニュス地区から日本までの旅は、通常ルートであれば、証明書や他国のビザの取得は簡単で、難民たちは40年の9月まで、カウナスではその後も交付を受けることができた。ビリニュス地区とカウナス地区からの難民は、ついに大量輸送の形で当地に流れ込んでくるようになった。」

ロメルによると、ポーランド人難民の流入が限られているのは、大体、物質的により貧しい状況、特に危険を伴い、しかも、費用のかかる未知なる東方への旅の計画に対する否定的な態度で説明されます。

ポーランド人の中には、陸軍の将校もいて、ロメルは、ポーランド独立のために戦う軍隊への志願兵の登録を慎重に進め、その志願兵たちをカナダや中近東へ送り出すという件にも関与しました。

難民については、その後、ロメルによると 40 年の秋から 41 年の春までの間に 2,300 名の難民が日本に来たようです。

面白いのは、ロメルは、その報告資料の中には、「杉原」という名前を一度も言及したことはありません。誰がカウナスでビザを発給したのか知らなかったのかもかもしれません。しかし、カウナス、モスクワ、ウラジオストック、その後、敦賀、東京、神戸の日本人の係員についてのロメルの評判は大変良かったのです。

ポーランド救済委員会の代表は、横浜及び神戸のユダヤ人団体と連絡をとり、東京と神戸にも事務所を設置しました。代表は、ウラジオストックからの難民が敦賀に到着したら出迎えに行き、入国手続きを手伝い、そこから神戸へ向かわせます。東京にやって来る数少ないポーランド人は大使館の敷地内に特別に建てられた別棟に泊まるのです。

杉原のビザは、10 日間しか有効でなかったから、目的地へのビザを取得するためにも、他のパスポートの手続きを済ませるために不十分でした。ロメルは日本当局と交渉して、このビザを 30 日間まで延長するよう要請していました。

日本は 41 年秋までは、ポーランドに友好的な態度をとっていました。その正式な態度が変化したのは、ドイツの対ソ攻撃が始まった 41 年の 6 月以降のことであり、それを契機に、東京のポーランド大使館を閉鎖せよという圧力が強まっていったのです。日本は公式に日独伊三国同盟の決定を確認せざるを得なかったのです。対ソ戦争中のドイツの勝利の結果、ポーランドは完全にドイツの占領下に置かれ、ドイツは、ポーランドをヨーロッパの地図から、また消し去ろうとしていました。結局、10 月 4 日に、日本外務省は在日本ポーランド大使館を正式に廃止し、大使の使命は終了したという通達を出しました。

ロメルは 41 年 10 月 26 日に上海に向かいました。日本政府は日本に留まっていたほとんどユダヤ人ばかりのポーランド避難民、約 1000 名全員を上海に移送しました。ロメルは特命大使として、個人的に難民の世話を引き受けました。オーストラリア、ニュージーランド、パレスチナのビザの割り当てを新たに獲得でき、残りの難民全員に割り当てを分けようとしていました。

41 年 12 月 8 日、日本が太平洋戦争を開戦した結果、12 月 11 日、ポーランドは、アメリカとイギリスとともに、日本に対する宣戦を布告しました。その結果、ポーランドと日本が敵国になったにも関わらず、ロメルは日本軍の占領下にある上

海で、特命大使として活動し、ポーランド人難民を救うために努力を続けました。

42年8月、上海のポーランド領事館が閉鎖され、その翌日に極東からポーランドの在外公館員全員が引き揚げることになるが、占領日本軍当局の同意の下に、在留してポーランド国民の保護を引き継いだのが、在中国ポーランド人連帯理事会でした。

ロメル大使は、ポーランド人、主にポーランド系ユダヤ人を救助するために多くの貢献をしました。東京に逃げてきた難民の衛生、衣類、文化面の援助や家族との連絡、日本への入国ビザ援助、パスポートの交付、目的地へのビザの手配などの面倒を見ながら、日本政府との仲介を果たしました。

ロメルは危険を伴う自国民のための活動を、敵国の日本軍占領下の上海でも献身的に継続しました。

ヤドバシエムのメダルには、タルムードから引用された、「一人の命を救うことは全世界を救うのと同じである」という句が刻まれています。

この文言は、ロメル大使の活動に当てはまると思います。

以上です。御静聴ありがとうございました。(拍手)